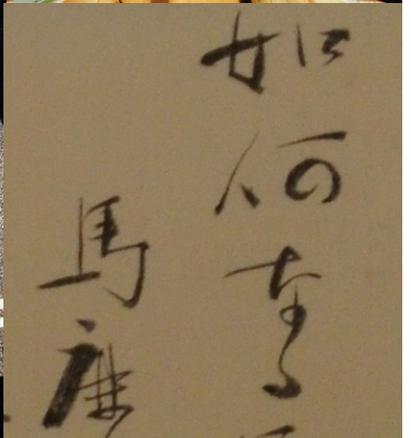
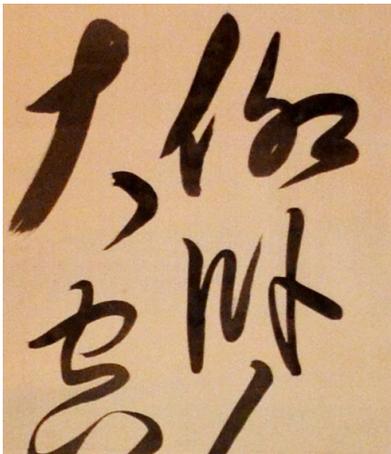


# 我孫子市文化財展 寄贈作品展

## 展 示 解 説



平成 29 年 2 月 25 日 (土) ~ 28 日 (火)  
我孫子市民プラザギャラリー

## 1. 寄贈作品

○緒方竹虎書 (1888年-1956年) 昭和8年1月1日制作 杉村家寄託

不見梅花癸 安知天地新 寄言幽谷鳥 首唱莫逡巡

梅花を見ず癸<sup>はっ</sup>す 安じて天地の新たなるを知る

言<sup>ことよ</sup>寄<sup>ゆうこく</sup>せる幽谷の鳥 首唱<sup>しゅしょうしゅんじゅん</sup> 逡巡することなかれ

ジャーナリスト、政治家。朝日新聞社副社長・主筆を務め、自由党総裁、自由民主党総裁代行委員、国務大臣、情報局総裁、内閣書記官長、内閣官房長官、副総理などの要職を歴任。楚人冠とは朝日新聞社時代に交友をもつ。

この書は、杉村楚人冠に贈られた書で、癸酉の年（昭和8年）の元日の朝に書かれたものであることがわかる。書の内容は、新しい意見を真っ先に主張し出すことをためらってはいけないというものである。

この年の前年には、犬養毅の銃殺や、上海事変、この年には、日本は国際連盟を離脱。次第に軍部の圧力が新聞社にもかかるようになってきたときである。緒方は、高橋是清が暗殺された二・二六事件では、新聞社を襲撃した兵士と対峙するほどの人物で、緒方の人物像、この時の世情を考えると、この書の意味もさらに深いものとなるのではないか。

○杉村楚人冠書 (1872年-1945年) 制作年代不明 杉村家寄託

如何<sup>いか</sup>なる馬鹿も 馬鹿と いはれては 怒る

ジャーナリスト、随筆家。明治36年朝日新聞社に入社。海外の新聞機構を朝日新聞社に取り入れたり、日刊『アサヒグラフ』創刊に尽力し、紙上で我孫子を紹介する随筆を多く書く。関東大震災を機にかねてから別荘を構えていた我孫子に居を移し永住する。

ユーモアや風刺に富んだ随筆を書いた楚人冠の書は、禅宗の教えを楚人冠なりにアレンジしたものや、この書のように面白味のあるものが多い。

○徳富蘇峰書 (1863年-1957年) 昭和2年5月制作 杉村家寄託

薰風掠面水紋斜 雨足湖塘長葦芽

弧棹不須尋去路 緑陰深處是君家

くんぼう かす しゃ あまあし ことう あしめ  
薰風、面を掠め水紋が斜す 雨足湖塘の葦芽長し

ことう りよくいん ところこれ  
弧棹にすべからく去路を尋ねべし 緑陰深し處是君の家なり

ジャーナリスト。雑誌『国民之友』や『国民新聞』を創刊。楚人冠らが活動した青年文学会を支援。楚人冠は一時、蘇峰に請われて『国民新聞』に英字新聞の翻訳や記事を書いた。

この書は、昭和2年5月9日、楚人冠の同僚の下村海南かいなんと蘇峰が楚人冠邸を訪ねた際に書かれたものである。楚人冠邸の様子は、松林の中に小道があり、随所に山百合やまゆり、萩はぎ、野菊のぎく、撫子なでしこなどが植えられていたという。そして蘇峰が感嘆したのは「舟中から眺めたる湖畔の風光は、最も妙だ」と言うように、舟から見た手賀沼の風景だという。我孫子の散策は、楚人冠家族のもてなしもあり、楽しんだ様子が窺える。

この時の様子は後日、「偷閑とうかんの一日（我孫子小遊）」と題し『国民新聞』に掲載され、その後楚人冠の『湖畔吟』にも収録された。ただ、軸では「不須」と書かれている箇所が、『湖畔吟』では「不要」となっており、書を掲載するにあたって、蘇峰が再考したことがわかる。内容は「五月の風が湖面の水を掠め水紋をつくる。その湖の堤には葦が長く茂っている。船頭に帰る道を尋ねると、山の緑の中にあるのが君の家である」となるが、再考した「不要」を当ててみると、「船頭に帰る道を尋ねるまでもなく…」と、少し詩から思い浮かぶ情景が変わり、蘇峰が手賀沼から見た楚人冠邸の様子と一致するのではないだろうか。

○堺利彦書さかいとしひこ（1871年-1933年）制作年代不明 杉村家寄託

鳩鳥喚晴烟樹暗 愁聽點滴欲消魂

風々雨々家山夕 七十阿嬢泣倚門

きゅうちょう よ えんじゅくら  
鳩鳥 晴を喚んで 煙樹昏し

点滴を愁い聴いて 魂消えんと欲す

## 風々雨々 家山の夕 七十阿嬢 門に倚<sup>よ</sup>って泣く

社会主義者、ジャーナリスト。『万朝報』で日露戦争非戦論を展開。明治36年幸徳秋水らと平民社を創立し、週刊『平民新聞』を創刊。大逆事件後は売文社をつくり生活を支えつつ、大正9年日本社会主義同盟を組織し、同11年共産党初代委員長となる。のち無産大衆党、全国労農大衆党などに属し、反戦活動に携わった。

今回の書は元々は堺の同志で、大逆事件によって死刑判決を受けた幸徳秋水が明治43年11月10日に、市ヶ谷の監獄で母に宛てた漢詩であったものを、堺が楚人冠に書いたものである。なお、楚人冠と幸徳は交友があり、楚人冠が幸徳を訪問した折に書いた記事が夏目漱石の『それから』での一コマのきっかけとなり、また、堺と楚人冠とも交友があり、楚人冠は堺を助けるために彼の書を買取ることがあった。

書の内容は、鳩は晴雨を知らせる鳥だというが、いまその鳩は雨に煙る木陰で頻りに鳴いている。耳を澄ませると霽<sup>あまだれ</sup>に落ちる点滴が腸を搔きむしるようだ。というのも、雨につけ風につけ、今年70歳になった老母が、息子の帰るのを故郷で待ち詫びているからだ。と、母を想う子の気持ちが綴られている。

○長谷川如是閑書（1875年-1969年） 制作年代不明 杉村家寄託

楚人にして冠すると名におへと そひとにもあらず冠もせず

ジャーナリスト、評論家。新聞『日本』で記者活動を始め、その社長であり主筆であった陸羯南<sup>くがかつなん</sup>が引退した後、三宅雪嶺<sup>みやけせつれい</sup>らと同盟退社。鳥居素川<sup>とりいすせん</sup>の招きで大阪朝日新聞社に入社し、「天声人語」欄などを執筆。社会部長となるが、政府当局による言論統制事件である白虹事件<sup>はっこう</sup>のため退社。以後も論文、随筆、小説、戯曲と多方面に健筆を振った。

ところで楚人冠のペンネームの由来を紹介する、楚人冠がアメリカ公使館に通訳として勤めていた時代、シルクハット置き場はどれも同じ箱で紛らわしく、目印を付けておく必要があった。そこで「楚人は木猴<sup>もつこう</sup>にして冠するのみ」という中国の歴史書『史記』一節が思い浮かんだ。自分が西洋文化の象徴の一つであったシルクハットをかぶる様を、粗野な楚人がうわべだけで飾って官職を持つ者のように威厳を振っていると揶揄<sup>やゆ</sup>された項羽<sup>こうう</sup>になぞらえたのである。これを踏まえてこの句を読むと、楚人冠の名の由来は、楚人冠の名は有名であるが、粗野でもないし、威張<sup>や</sup>ってもいない。と楚人冠を褒めてい

るものである。

○夏目漱石書（1867年-1916年） 明治45年6月3日制作 杉村家寄託

仰臥人如唾 默然觀大空 大空雲不動 終日杳相同 春日偶成

ぎょう が ひとおし ごと もくぜん  
仰臥人唾の如し 默然と大空を觀る 大空の雲は動かす

よう たまたまなる  
終日杳と相同じくす 春の日 偶成

小説家。松山中学、第五高校、東京帝国大学で教鞭を執る。この間に「吾輩は猫である」「坊ちゃん」などを発表して文名を高め、東京朝日新聞社に入社して以後、数々の小説を朝日新聞紙上に連載した。一方で、文芸欄を創設、自ら担当した。東京朝日新聞社入社以来、楚人冠とは漱石が出社するたびに昼食を共にする仲だった。楚人冠にとって漱石は「尊信する先輩」であった。

この漢詩は、漱石が修善寺に療養した折、一時危篤に陥った。その状態から快復した後、『東京朝日新聞』に連載した記事の文中に記された漢詩を楚人冠の所望に応じて揮毫したもの。新聞には「默然見大空」と掲載されているのを「默然觀大空」と変わっており、推敲を加えたようすがわかる。また、本来は「病中の作」とすべきところを、「春日偶成」春の日たまたまできた詩としている。この間違えについては、既に漱石も制作したときにわかっており、軸の裏に貼ってある漱石の書簡にその理由が記されている。

文の内容は、彼が病床であるため動けず、ただ黙って大空を見ている。大空の雲は動かず一日ずっと変わらない。と、太古から変わらない空の様子と病気で臥せっている漱石の対比され、空しさがより際立っている漢詩である。※作品の一部に、今日的には差別的もしくは不適切と考えられる表現が含まれていますが、作品自体の歴史的・文学的な価値を尊重し、原文のままとしています。

○志賀直哉書（1883年-1971年） 制作年代不明 白樺文学館蔵

鳥の声に覚め虫の音に埋もれて眠る

小説家。白樺派を代表する小説家の一人で、その後の多くの日本人作家に影響を与えた。代表作に『暗夜行路』『和解』『小僧の神様』『城の崎にて』など。柳宗悦の勧めで我孫子に移住し、大正4（1915）年から同12年までの約7年

半暮らした。

この書の制作年こそ不明だが、まさに我孫子時代の様子を詠んだとも思わせる作品。この言葉を胸に白樺文学館前のハケの道を散策をするといつもと違った風景に見えるかもしれない。

○柳宗悦書（1889年-1961年） 大正9年～昭和5年制作か？ 谷口家寄贈

ひと つきみなも やど ももちづき  
一ツ月水面二宿り百千月

思想家、美学者、宗教哲学者。白樺派の一人。生活に即した道具に注目して「用の美」を唱え、民藝運動を起こした。我孫子に居住した理由は、叔父で、講道館柔道の創始者である嘉納治五郎が勧めたためであった。

この書は、手賀沼に映った月が、揺れる水面に数多くきらめく様子を詠んでいる。書の裏書には「直枝子姉上二贈ル、陶軸武一、文書装宗悦、百千月」とあり、宗悦の姉直枝子にこの書が贈られたことがわかる。また、軸は陶製で河井寛次郎の甥である河井武一が製作した。

○嘉納治五郎書（1860年-1938年） 我孫子市蔵

擇道竭力

道<sup>えら</sup>を<sup>つ</sup>擇びて力を竭くす

教育者、柔道家。講道館柔道の創始者であり柔道・スポーツ・教育分野の発展や日本のオリンピック初参加に尽力するなど、明治から昭和にかけて日本におけるスポーツの道を開いた。

この書は自ら選んだ道（将来）に全身全霊をかけて進む。といったスポーツマンの精神を説いているが、それは、いつの時代にもあてはまるのかもしれない。

## 2. 中里薬師堂薬師三尊像と十二神将像

□薬師観音像と十二神将像□

### ①概要

我孫子市中里 238 番地（湖北駅北東）の中里薬師堂内に安置される仏像群。薬師三尊像、十二神将像とともに江戸時代後期の作。所有者である中里区の住民によって日常管理され、毎年2月11日にのみ御開帳されている。

本尊である薬師如来像は高さ 51cmの立像で、一木造。両手・両足に別材を差し込み、左手に薬壺、頭部を内刳し玉眼を嵌め入れている。蓮弁型の光背は、身光部と周縁部を 4材の板で作成し雲文で装飾している。

脇侍となる日光菩薩像・月光菩薩像は高さ 37cmの立像で、一木造。本尊と同様に頭部を内刳し玉眼を嵌め入れている。上半身には天衣、条帛を身に着け、下半身に裳を着用している。手には雲上に乗る日輪、月輪を持っている。頭飾は金属でできている。

十二神将像は子丑寅卯辰未午未申酉戌亥をあらわす十二の像で、頭の上に干支が象徴的にはめ込まれている。いずれも高さ 57cm内外の立像で、寄木造。面部を割り剥いで玉眼を嵌め入れている。基本的には甲冑を身に着け、手には持物（法具・武器）を持っているが、衣のみを身に着けるものもある。岩座とよばれる台座の上に立っている。

これらの仏像群は平成 18（2006）年、我孫子市指定文化財（有形）となった。

## ②薬師三尊像、十二神将像とは？

○薬師三尊は薬師如来と日光菩薩、月光菩薩の三尊を指す

薬師如来は十二の大願を立てて仏陀となり、この世の人々の病氣平癒、延寿、災禍除けを担い、日光菩薩・月光菩薩は闇を照らし、薬師如来を補佐する役割を果たしている。

十二神将は宮毘羅大将、伐折羅大将、迷企羅大将、安底羅大将、頰爾羅大将、珊底羅大将、因達羅大将、波夷羅大将、摩虎羅大将、真達羅大将、招杜羅大将、毘羯羅大将を指し、十二神将は薬師如来の十二の大願に対応して、薬師如来を信じる人々を守護するもので、後に昼夜十二の時、十二の日、十二の月を司ると考えられ、十二支と結ぶようになる。ただし、外見上で十二神将像を判別するのは難しく、伝○○像とされることが多い。

## ③中里薬師堂薬師三尊像の修理

製作からおおよそ 200 年が経過し、塗装の剥落などが目立つようになり、持物や光背も失われ、中里区より修理要望が寄せられたことで、市では文化財審議会と協議の上、中里区が「我孫子市文化財保護補助金」を活用して修理することとした。 ※所有者負担 1 / 2、市負担 1 / 2

## 【修理の内容】

○平成27年度

□薬師如来像□

(修理前) 頭部の肉髻珠・白毫<sup>にっけいしゅ びやくごう</sup>、手足が欠損し、漆箔の剥落が著しく、衣の群青色は後補のもの。蓮弁型の光背先端部は他からの転用で、台座は日光・月光菩薩より転用したもの。袖口や背中には後補の部材が貼り付けられ、ずれが生じていたことがわかった。

(修理後) 後補彩色(衣・肉身)を除去し、剥落止めを行なった。後補部材(袖口等)を除去し、欠損した手足・肉髻珠・白毫を復元製作した。転用された台座を交換した。

□日光菩薩像・月光菩薩像□

(修理前) 後補の厚い金彩色に覆われ、天衣<sup>てんね</sup>の遊離部が離脱している。日輪・月輪の軸が短く、金属製の頸飾と瓔珞<sup>ようらく</sup>が亡失している。台座が入れ替わり、塗装剥落し、光背が亡失していた。

(修理後) 後補彩色を除去し、剥落止めを行う。天衣を復元製作し、日輪・月輪の軸を製作。転用された台座を交換・復元し、頸飾・瓔珞の金具、および光背を復元製作した。



修理前



修理後

○平成28年度

□午神像□

(修理前) 全体的に部材の結合が緩んでおり、右腕が亥神像のものと入れ替わっていた。後補の塗装が施されていたが、剥落が著しい状況であった。光背の火炎が失われていた。

(修理後) 部材を解体し、再結合し直した。玉眼を描き直し嵌め直した。入れ替わっていた亥神像と腕を交換した。後補の塗装を落とし、最も古い漆層のみ残した。失われた光背火炎を復元した。



修理前



修理後



首の墨書「午」



#### 頭部の分解状況

左の写真右上にあるのが玉眼で、真ん中の顔の部分と頭部の部分の間に嵌め込み、玉眼を出すために開けた穴に合わせる。その他にも、右下の部品は玉眼を裏から押さえるために使われた。

□<sup>さる</sup>申神像□

(修理前) 全体的に部材の結合が緩んでおり、両手先、左足先は失われ、右足先は別の像のものが誤ってつけられていた。かんざし、持物、光背が失われていた。後補の塗装が施されていたものの、剥落が著しい状況であった。

(修理後) 部材を解体し、再結合し直した。玉眼を描き直し嵌め直した。酉神像の右足先に誤ってつけられていたものをつけ直した。両手先、かんざし、持物、光背を復元した。後補の塗装を落とし、最も古い漆層のみ残した。



修理前



修理後



首の墨書「申」



身体の分解状況



岩座の分解状況

□<sup>とり</sup>酉神像□

(修理前) 全体的に部材の結合が緩んでいた。右足先は申神像のものが誤ってつけられ、持物、光背が失われていた。後補の塗装が施されていたが、剥落が著しい状況であった。

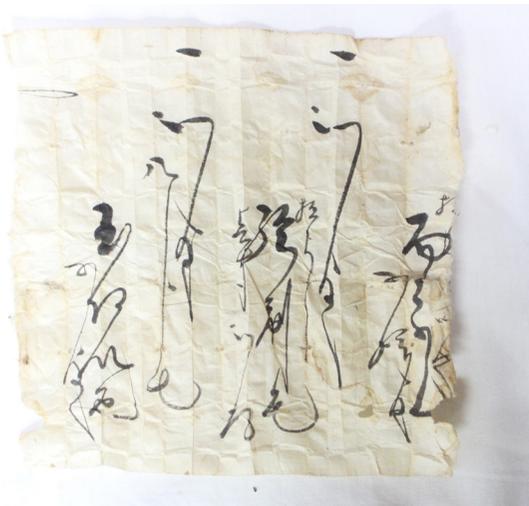
(修理後) 部材を解体し、再結合し直した。玉眼を描き直し嵌め直した。右足先、光背を復元。後補の塗装を落とし、最も古い漆層のみ残した。



修理前



修理後



玉眼おさえ（反故紙再利用）



首底の墨書「酉」

### 3. 裁縫雛形

#### ○概要

裁縫雛形とは、明治期の教育者渡辺辰五郎によって考案された雛形尺（実寸の1/3）と呼ばれた縮尺定規を用いて作られた衣服のことを指す。渡辺は千葉県長南町生まれ。江戸の仕立屋に奉公し、裁縫技術を身につけて女子に裁縫を教え、後に千葉女子師範学校（現千葉大学）、東京女子師範学校（現お茶の水女子大学）で教鞭をとり、和洋裁縫伝習所（現東京家政大学）を創設。彼が考案した裁縫雛形は、少ない布地で多種類の裁ち縫いを短期間に学べる画期的なもので、全国の女学校における裁縫教育の普及に大きく貢献した。

#### ○指定文化財の裁縫雛形について

今回展示する裁縫雛形は、東京裁縫女子学校に在籍してた市内在住の故秋谷きい氏が東京裁縫女学校で授業の課題として作成したもの。秋谷氏は明治45（1912）年から4年間東京裁縫女子学校で学び、教員免状を取得し、その後、各地の女学校で裁縫教師を勤めた。

寄贈された資料のうち、文化財登録されている裁縫雛形は全85点。衣冠、十二単衣といった有職衣類から、和装、また、明治・大正期にはまだ珍しかったミシン縫いの洋装などが含まれている貴重な資料である。

裁縫教育は、戦前の女子教育の中で重要科目の一つであり、女性史・教育史からも大切な分野でありながら、その資料は残されているものは少ないため、本資料は近代女子教育を考える上でも貴重なものである。なお、東京裁縫女子学校の後身である東京家政大学博物館に卒業生から寄贈された裁縫雛形約3,000点は、裁縫用具・教科書と併せて平成12年に国の重要有形民俗文化財の指定も受けている。

#### おねがい

本会場では、寄贈作品に関しては、撮影不可としています。また、中里薬師三尊及び十二神将、文化財についてはフラッシュを使用しての撮影はご遠慮いただいておりますので、予めご了承ください。